



学生時代に覚えさせられたことって、簡単に忘れられない。それは、サイン・コサイン・タンジェントなんていう、いまじゃ魔法みたいな数学用語のことばかりじゃなくって、たとえば、

「ごきげんよう」

という、あいさつだったりする。

あたしの通っていた女子校では、その「ごきげんよう」が、毎日のあいさつだった。そういうことは大人になってしまうと笑い話になってくれるのだけど、やっぱり、その当時学校に流れていた空気、上流の雰囲気というものは、どれだけ洗っても消えない入墨のように、あたしの心の奥底にのこっている。

「ミナコちゃんって、上品だね」

大人になってからの知り合いは、みんなそういつてくれる。そこで使われる上品っていうのは、もちろんあたしへの褒め言葉だ。素直に喜ぶべきだし、うれしい。それはわかっているんだけど、あたしはなんだか、重苦しい気分になってしまう。上品だとか、純粋だとか言われても、まるで褒められた気がしない。全然うれしくない。それどころか、なんの嘘もつかない純粋ない子だと“烙印”を押したあげくに、影ではあたしのことを笑いものにしているような気がする。

自慢じゃないけど、あたしはテストの点数はよかった。そして、一応、素直なんだとは思う。「ごきげんよう」の精神は自然に身につけているとは思う。でも、あたしは別に、誰かのためにテストの点をとっているわけでもないし、みなさんの期待に応えるために純粋でいるわけでもなかった。それなのに「上品だね」といわれるたびに、すべてをひっくりかえしてしまいたくなる。

大学だって、いつのまにか偏差値が高いところに進学することが当然のように期待されていた。仕事だって、当然、エリートコースへ進む……それが「ミナコちゃんらしい」と、どこかで周囲が決めて付けていた。エリートに生きるっていうのは、こんなに息苦しい人生なんだろうか？

いつも、皆にうらやましがられるような、表街道を堂々と歩いて、その陰では必死になって競争に打ち勝つことを死ぬまでくり返す——こういうことが勝ち組だったり、エリートだったりするんだとしたら、あたしはなんだか借り物の人生を生きている気がしたものだ。

——そんな話を、ミナコは整体師アミのマッサージを受けながら、ずっと話しつづけていた。整体師アミは、ミナコの話にウンともスンともいわず、てのひらにのぼしたオイルで、せっせとミナコの体に触れている。ミナコの目には、ホットタオルがかぶさっているのだから、ミナコにはアミの姿はみえない。

ミナコは2019年の今年、33歳になった。整体師アミとは年齢もちかいことがあって、先生と施術者というより、まるで親友のように自分の話ができる。アミの手に触れられていると、「こんな話をするなんて恥ずかしい」という感情は消えてしまう。目にタオルをかけて、マッサージを受けているあいだ、ミナコは自分のなかにたまっていた毒素のようなものが、きれいさっぱりには抜けていくような気がするのだ。

ミナコは、今では政府主導による「日本活性化プロジェクト会議」の委員にも選ばれている。大学卒業後、しばらく就職活動に悩んだミナコが選んだのが、渋谷に「たまりば」をつくるという志をもった、ベンチャー企業だった。いつもエリート、だったミナコにとって、上昇でも下降でもない、「水平志向」という考え方は斬新で、ミナコは、自分が輝くのではなく、みんなが気軽に集まれる「場」をつくることだけに専念して7年働きまくった。

ミナコ自身にスポットライトがあたることはない。いつも、用意した「場」に来る人が輝けるように、演劇における「黒子」のような存在になること——それが2012年からの7年間、ミナコが心がけてきたことだ。自分は目立たないようにしよう——そうおもって一生懸命動けば動くほど、ミナコの存在が大きくなっていくから、不思議なものである。今では、日本政府から「日本全体を盛り上げてほしい」と依頼されているミナコだった。

人前で、いつも笑顔をやすことがないミナコは、ときどき、ほんの少しずつ、自分がまた「いい人」の“烙印”を押されているような気がすることがある。少しずつ毒素のようなものがたまっていく。知性という壁でしっかりと「ダム」をつくりあげていても、その壁の奥では、黒くてドロドロしたものが、少しずつ水位をあげてきているのだ。

自分でも理解できないのは、そのドロドロは、今の仕事の愚痴というよりも、「ミナコさんって、いい人だね」と言われたときに発生する。ミナコは、もう20年以上も前の小学生時代の、いい子を演じていた自分を思い出すと吐き気におそわれる。それは、何度ドロを吐き出しても、また同じ場所で同じものが湧き上がってくるのだ。

不思議だなあ、とミナコは、ときどき、そんな自分を冷静にみている。

けれど、大人になったミナコには、荒川にある整体治療院という隠れ家があるのだ。こうしてベッドの上で目を閉じて、体のリンパをマッサージされているうちに、思わず口にててくることを、しっかりと、吐き出していくこと。その時間、いい人でも、えらい子でもなくなる。

精神的にも肉体的にも生まれたままの姿に戻るミナコを、同性で同世代のアミが、無言で受け止めてくれる。そのことによって、ミナコは浄化されていく。口に出してしまえば、いろいろと楽になるものだ。一度、嫌いだ！ と言ってしまえば、とたんに嫌いと言ったはずのものが、今度

は好きになってくる。だから、不思議だな、とミナコはいつも思う。

ミナコは、いまベッドの上で、あれほど自分への教育や、自分に期待をして無理な負担を押し付けてきた環境を、それこそ呪うほどうとうとしいと言ったのだったが、それをこうして、マッサージ師アミの前で話した途端、急に、両親のやさしさや、当時の担任の先生の笑顔を思い出したりする。

「ごきげんよう」という、イヤイヤながらの挨拶だったあの時間のなかに、玉露のような、あまさだっただったのだ。

それで、そんな自分がわからなくなってきた、施術中にミナコは泣いてしまう。でも、ミナコの目にはホットタオルがかかっているから、マッサージをしているアミには涙までは見えていない。もっとも、アミはミナコが泣こうがわめこうが、ほほえもうが上品にしていようが、少しも態度を変えることはなく、マッサージを続けている。

90分のマッサージが終わると、ミナコは、今までの矛盾した葛藤の時間のことをケロリと忘れる。アミも、マッサージ中に聞いたミナコの話のことをケロリと忘れる。そうして、アミがいれたハーブティーを、二人で飲みながら、最近ミナコが関わったイベントでおこったちょっといい話を、二人でニコニコしながらシェアする。

「それじゃ、またね」

「また、お待ちしております」

ミナコは、都電荒川線の列車にゆられながら、職場である渋谷方面にむかう。ミナコのスケジュール帳はぎっしりと予定で埋め尽くされていて、その予定のほとんどが、自分以外の誰かを輝かせるためにがんばる！ というイベントである。みんな、ミナコと知り合うたびにたずねる。

「ミナコさんって、どうして、誰かのために頑張れるんですか？」

ミナコは、ニコニコと笑って、そのときだけ、少しのあいだ、自分の隠れ家のことを思う。けれど、ミナコは、自分にも毒をだしている時間がある、とは言わない。ミナコは、ニコニコと笑いながら、そんな自分はちょっとズルいかな、と思って、心なかでちょっとだけ舌をだしている。

今日も、渋谷はにぎわっている。

(了)